

メトロポリタン史学会・秋季シンポジウムのお知らせ

先にお知らせしたシンポジウムの内容が、以下のように決定されました。会員の皆さんの参加をお待ちしております。また非会員の方の参加も大歓迎です。まわりに声をかけてください。なお、終了後に近くの飲み屋で簡単な懇親会を行いたいと思います。都合のつく方はこちらの方もどうぞご参加ください。

歴史における人の移動とネットワーク 人はどのように移動するのか

日時：2005年11月26日(土曜日)10:00～18:00

会場：首都大学東京 国際交流会館大会議室(入場無料)

(京王相模原線南大沢駅下車徒歩15分)

・ 午前の部(10:00～12:20)

山田昌久(首都大学東京・東京都立大学)

移送路の整備、土木技術者の移動、建築資材の移送

日本古代～近世における人の集中と木造都市構築を考古学から考える

森山央朗(東京大学大学院)

10～12世紀西アジアにおける伝承学者の旅と知識の流通

亀長洋子(学習院大学)

中世ジェノヴァ人の移動と定住 キオスの事例を中心に

(昼休み)

・ 午後の部(13:30～16:40)

川合康(東京都立大学)

中世武士の移動の諸相

清水有子(東京都立大学大学院)

16世紀スペインの太平洋探検航海と東アジア

(休憩)

帆刈浩之(川村学園女子大学)

近代広東人移民のビジネスと慈善

北村暁夫(日本女子大学)

ファシズム期におけるイタリアからフランスへの亡命者と移民の生活世界

(休憩)

・ 全体討論(17:00～18:00)

【歴史随想】

その後のネアンデルタール

小野 昭（首都大学東京・都立大学、考古学）

人類学にあまり関心がない人でも、ドイツのネアンデル渓谷にある小フェルトホーファー洞窟から、1856年に発見された人類化石のことは知っているに違いない。タイプ標本として著名である。しかし、この洞窟が石灰岩の採掘によって19世紀末に消滅したため、正確な位置がいままで不明のままであった。ドイツの二人の若い研究者の執拗な探索によって、原位置が1999年に特定された。いままでだれもなしえなかったことである。単に故地を特定したにとどまらず、ここからネアンデルタール研究の新たな地平が切り開かれることにもなったのである。

ネアンデルタール問題は、人類進化の系統発生上の位置、分布、石器を中心とする道具製作技術の問題、埋葬風習や食人、年代などをめぐり百数十年以上にわたり常に議論の的から外れることはなかった。近年では特に新人のアフリカ起源問題との関連で、現世人類への連続・不連続問題、後期旧石器文化を担った人々との共存問題、形質と道具との対応・非対応問題など、多くの話題を提供している。専門書から普及書、果てはネアンデルタール人を主人公とした小説にいたるまで世界中で出版がさかんである。

位置と経過

ネアンデル渓谷はドイツのデュッセルドルフの東約13キロの地点にある渓谷で、流れる川の名はデュッセル川。そこには「ネアンデルタール洞窟」と名づけられた洞窟があるが、人骨が発見されたのはここではなく「クライネ（小）フェルトホーファー洞窟」である。1854年には正式に「マルモール工業株式会社ネアンデルタール」が操業を開始した。1900年にはすべての洞窟は破壊されたが、採掘は1912年まで続いた。この地域はドイツ・ルール工業地帯の前身で、イギリスに出遅れたドイツの産業革命の波はここにも激しく押し寄せた。石灰岩はセメントの素材として大量に必要とされたからである。景観を含めた文化遺産の保護が問題になる前の時代のことで、今その場に立っても当時を偲ぶことは全くできない。

石灰岩採掘により消滅した洞窟は、ネアンデル渓谷だけでも5つある。1)ネアンデルタール、2)トイフェルスカンマー、3)フェアデスタール、4)フェルトフォーファーキルヒェ、そして5)クライネフェルトフォーファーである。

1856年に発見された人骨については、発見直後に博物学のJ. C. フールロットが人の骨であることを認め1856年9月9日付けのボン新聞に最初の記事がでた。しかし、この人骨が古い人類の骨であることが認められるのは19世紀の末になってからである。

DNA分析と再発掘

人骨が出土した原位置を突き止めようとしていた若い考古学研究者シュミッツとティッセンは、ネアンデルタール人たちはわれわれの祖先なのか、それを明らかにするために1856年のタイプ標本のDNA分析用試料をとりだして分析にかけたらどうなるのかと考えた。専門家に相談するが成功率は5パーセント程度だと聞かされる。人骨から試料を採取することなど許可されるのか大いに悩んだ。だが、人骨標本を所蔵しているボンのライン州立博物館は、最終的に学問的意義を認め計画を許可した。試料をとりだす場所は検討の結果、保存が極めて良好な右上腕骨の骨幹と決まった。そこから長さ1.4センチ、幅は骨幹の

最大径、重さ 3.5 グラムの試料を切り出して分析にかけることになった。そして分析は成功した。1996年 11月 13日のことで、この日は遺伝学、人類学、考古学にとって記念すべき日となった。この結果は 1997年 7月 11日に分子生物学の雑誌 Cell に掲載された。結果はネアンデルタール人はわれわれの直接の祖先ではない可能性が高いことがわかった。

場所を絞り込む

こうしてネアンデルタール人の骨は再び世界的に著名となったが、発見の場所はその後全く注目されなかった。発見された洞窟の正確な位置や図面などの記録は無い。ケルン大学の G.ボジンスキー教授によって 1983年から 85年まで、洞窟の位置特定のために小規模な発掘を実施されたが、うまく発見できなかった。その後 1991年と 96年に埋蔵記念物保護局の許可を得て先の二人は追跡発掘をしている。1997年 9月に発掘は開始された。発掘も残すところあと 1日に迫ったところで後期旧石器時代のフリント製小形ナイフ形石器を含む 4点の石器を発見し、小フェルトホーファー洞窟も遠くはないと確信する。この成果で発掘に 3週間の延長許可がでた。石器、骨片が多数出土した。その中には長骨端の丸みを帯びた小さな破片もあった。「第 5 トレンチ、第 III 層、遺物番号 13」としてポリ袋に入れた資料である。この調査で最終的に 15 キロ詰め土の土嚢袋 700 袋の土を持ち帰った。

たしかに、洞窟の壁の下端部を確認し、堆積物中から旧石器時代の資料を得た。だからといって、これが 1856年に化石骨の発見に至った同じ洞窟であるという保証はない。持ち帰った土をすべて洗った結果 3000点以上の石器、剥片が回収された。後期旧石器時代のグラヴェッティアン（およそ 30000 ~ 25000年前）と、中期旧石器時代のミコッキアン（およそ 50000 ~ 35000年前）の石器に分離できた。ミコッキアンは後期ネアンデルタール人の時期と重なる。

本当にその場所か？ - 骨の接合による原位置の特定と年代 -

では、本当にこれが小フェルトホーファー洞窟から発見されたネアンデルタール人の骨の一部なのか。これを確かめるに、1856年発見の化石骨にこれらの骨が接合するのかどうか試された。1856年発見の左大腿骨遠位端外側に認められる欠損部に、発掘で得られた骨片「第 5 トレンチ、第 III 層、遺物番号 13」が接合した！ 最初の発見から 143年を経て、1999年 1月 21日のことである。この小骨片によって、1997年の発掘地点が小フェルトホーファー洞窟であったことに間違いのないことが証明され、洞窟の原位置が確認された。同時にタイプ標本の化石の年代も、放射性炭素 14による年代測定の結果 40000年前であることが初めて明らかにされたのである。

洞窟の原位置を特定するために 19世紀の絵画、リトグラフ、地図など可能な記録を広く当たって堅く読み込み、執拗な追求によって原位置がついに特定されたのである。基本の一般調査と発掘調査、物の形態学的研究の重要性、またそれとは別次元の年代測定や DNA 分析、学術上の意義を認めて貴重な骨を一部破壊の分析にゆだねることを許可したライン州立博物館と関連の埋蔵記念物保護局の勇気ある判断など、一つの成果の背後には数多くの地道な努力の積み重ねと幸運が隠されていることがよく示されている。2000年にも発掘がおこなわれ、そこで回収された人骨片（左頬骨）が、今度は 1856年発見の頭骨の左眼窩上隆起下端に接合した。ネアンデルタールのタイプ標本化石頭骨の顔の部分がかかなり具体的に理解できるようになったのである。

来年 2006年は人骨発見 150周年である。シンポジウムと博物館での展示など、さまざまな記念行事が

大規模におこなわれる。

関心のある方は、下記の文献で詳細がわかります。

Schmitz, R. W. und Thissen, J. 2002 Neandertal: Die Geschichte geht weiter. Spektrum Akademischer Verlag, Berlin. S. 327. ISBN 3-8274-1345-1

Schmitz, R. W., Serre, D., Bonani, G., Feine, S., Hillgruber, F., Kranitzki, H., Paeaebo, S., and Smith, F. 2002 The Neandertal type site revisited: Interdisciplinary investigations of skeletal remains from the Neander Valley, Germany. Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America, 99(20): 13342-13347.

第1回 書評会 開かれる

7月18日(月・海の日)に、第1回書評会が首都大学東京・国際交流会館中会議室で開かれました。参加者は約20名で、松本彰・立石博高編『国民国家と帝国 ヨーロッパ諸国民の創造』(山川出版社、2005年)を安田浩、鍋谷郁太郎、中野隆生の3氏が書評し、編・著者を交えて活発な討論が行われました。詳細は、『メトロポリタン史学』創刊号(12月刊行予定)に掲載予定の書評会報告をご覧ください。

書評会・予告

以下の要領で第2回書評会を開催します。詳細は追ってお知らせいたしますが、昨年11月に都立大学史学科主催で行われたシンポジウムの報告集をとりあげます。ふるってご参加下さい。

日 時：2006年1月28日(土) 午後1時～5時

会 場：首都大学東京 5号館(人文棟)1階143号室(人文会議室)

書 評：小谷汪之編『歴史における知の伝統と継承』(山川出版社、2005年)

評 者：交渉中

第二回総会及び大会・予告

メトロポリタン史学会第2回総会・大会を、2006年4月22日(土)に首都大学東京・国際交流会館で開催します。総会では1年間の活動をしっかり総括したいと思います。ご意見をお寄せください。また大会テーマは歴史認識と歴史教育をめぐる問題を予定しております。ご期待ください。

【事務局からのお願い】

会費納入率が80%にとどまっています。会費未納の方には振替用紙を同封しました。一般5,000円、学生・院生3,000円です。会財政の確立にご協力ください。

今年度の会員拡大目標の150名まであと一息です。未入会の卒業生がいたら是非声を掛けてください。経費節約のため、メール・アドレスをお持ちの会員には、会報をメールで配信させていただきました。ご了承ください。

メトロポリタン史学会(会長 佐々木隆爾)

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部人文・社会系国際文化コース
歴史・考古学分野内 : 0426-77-2110(木村誠研究室) E-mail: mshigaku@comp.metro-u.ac.jp

URL: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/> 郵便振替: 00100-0-537287